妙安寺だより　303号

御　会　式　（おえしき）

「お会式」とは、宗祖日蓮聖人の忌日に修する法会（ほうえ）のことです。
お会式は、御命講（おめこう）・御影講（みえいこう）とも称され、日蓮聖人を鑽仰（さんごう）する庶民によって行なわれてきた仏教行事でもあります。

今から７５０年ほど前の、建長５年（１２５３）４月２８日、はじめてお題目をお唱えになってから、流罪・死罪にもおよぶ大難４カ度、さらには無数の小難を受けながらも、私たちにお題目の信仰をうえつけて下さった日蓮聖人は、弘安５年（１２８２）１０月１３日の午前８時頃、今の東京池上・池上宗仲邸にて、御年６１歳で御入滅なされました。
そのとき、大地は震動し、秋だというのに桜の花が咲きほこったとも伝えられています。

そして、翌１４日ご葬儀、１５日には池上で荼毘（だび）の式をあげ、「墓は身延に建てよ」というご遺命によって身延山にご聖骨は納められました。
それ以来、毎年日蓮聖人のご命日には、弟子信者たちが法要を営み、報恩の儀式を挙げ、命日やその前の晩、つまりお逮夜（たいや）の法要を、現在では「お会式」と呼んでいるのです。

お逮夜には、万灯（まんどう）のまわりに美しく垂れ下がっている桜の紙は、「御祖師花（おそしばな）」ともいわれ、日蓮聖人が、御入滅になられたとき、池上家の庭の桜の木が、時ならぬ花を咲かせたという伝えによって、桜の花をなぞらえてつくられ、これにお題目や皆帰妙法（かいきみょうほう）などの文字を書き、ウチワ太鼓をたたきながら、唱題の大音声（だいおんじょう）をとどろかせながら、町中を行進してまわります。

お会式の「まんどう」は、一灯でも万灯というように、日蓮聖人のご法恩のために、捧げるまことのご供養の一灯という意味がこめられています。

宗　祖　御　報　恩　　お　会　式　法　要

10月25日（日曜日）　午後1時より　お会式法要　正午より　お斎（オトキ）

午後2時より　法　話
講　師　北九州市小倉北区　真浄寺院首　中　村　潤　一　上人

話　の　泉

◎数珠屋と句読点

近松門左衛門が、自作の浄瑠璃に句読点を打っているところへ、懇意な数珠屋の主人が来て、傍（そば）から見ていたが、
「そんなに丹念に句読点を打たないでも、浄瑠璃を語るほどの者なら、誰でもわかりそうなものだ」とつぶやいた。

門左衛門は聞こえぬふりをしていたが、数日後、数珠屋へ手紙を出して数珠の製作を頼んだ。
開いてみると「ふたえにまげてくびにかけるようなじゅず」を拵（こし）えてくれとあった。
数珠屋は早速、「二重に曲げて首にかけるような長い数珠」を作り上げて届けさせた。それを見た門左衛門は

「たいそう立派な数珠ではあるが、これは注文書と違うので、もう一度注文通りの品を作ってほしい」と返してよこした。
数珠屋の主人は「そんなはずはないが」と、注文書に照し合わせて見ると、寸分の誤りもないので、自分自身で門左衛門のところへ出かけ「この通り、注文書と一分の相違もないではありませんか」と、注文書と数珠を突きつけると、門左衛門は落ち着き払って「よく注文書を読んでくだされ、私は、『二重に曲げ、手首にかけるような数珠』と、ちゃんと書いたではないか。二重に曲げて首にかけるような長いものは、巡礼でもあるまいし要るわけがない」といった。
数珠屋は、まんまと仇をとられてしまった。

※平成22年度の「地涌の声」の功徳主を募集しています。（1月　5，000円）
希望の月と5，000円を添えて、お申し込みください。希望の月が重複した場合は、先着順になります。